

書叢ギカア
及人LILSギカ
作伴スアイトズ

特 110
432



始



持110
432

編二十四第書叢ギカア



露國ドストイエフスキー原作
加藤朝鳥編

虐げられし人々

大正
3. 9卷 1
内交

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや
懊惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄
て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轆を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜
を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立
志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せ
しめ度し』との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が非才自ら悶
みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以
也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝
文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を
極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尅大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず
閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行する
に至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十錢
にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。
如何に尅大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。
依つて以て從來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫
の、高價、尅大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんと
す。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。
希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

大正三年三月

赤城正藏白

(2)

序

傑作を縮約するすることは、姉のつぎに妹をつくるに喩へられやう。妹を眼
のあたり見たただけで、姉の容貌が想像出来る程であつたなら、縮約書は傑作
の眞價を知るに必ずしも不備なものではあるまい。所謂ガレリスピーチにさし
つかへ無い程度の智識を吸収するの具としても、縮約書と云ふ妹を持つて居る
本は姉としての肩身が廣い譯である。最近の出版界では、恰も引舟女郎の様に
傑作は大抵小さな圓型な禿かぶろを持つて居る。さて此の意味で、此の縮約書の姉さ
んは、云ふまでもなく新潮社出版昇曙夢氏譯『虐げられし人々』であつた。無論
姉の感化も影響やは夥だしい。そつくり姉の眞似をして、姉の開拓した苦心を
そのまま奪つた處もあるし、姉の缺點があつたらそのまま、無邪氣にその缺點を
眞似て居る處もあるのであらう。

姉の口吻をそのまま真似て云へば、此の『虐げられし人々』はドストイエ、フスキイの生涯の中で最も不幸な、最も悲惨な困厄時代に著されたものである。概して複雑な都會生活の印象と共に、ペテルブルグの貧しい、隠れた一角の暗い惨な生活がクツキリと、鮮やかに、濃やかに、寫實的に描かれて居る。そして此の書が特に自傳の形式であつて、作中の人物ワーニヤがドストイエフスキイ自身と見られる處に、他の同氏の作品よりは更に興味深く讀まるべきものであることもとより疑をいれぬ。

大正三年七月故郷伯耆に

朝鳥生識

虐げられし人々

加藤 朝鳥

第一編

一

去年の三月二十二日私は其の日終日貸家を探し廻つたのであつた。その前の年の秋の頃から引越したいと思ひながらも、到頭春まで延びてしまつた。私のもとめる家は、必ず一間だけ潤々ひろびろとしたのが要る。貸間はいけない。特別の住宅であつて、そして家賃は廉やすいのと云ふやうな次第で、此の私の小説的な空想の壺にあてはまつた家など中々見つかりはせぬ。

其の日は朝から私の身體は變へんであつた。夕方には熱でも出たやうに慄ふるとなつ

てしまふ。私の草臥れた足は、ベテルスブルグの街を辿つた。此の大都に射る太陽
 わけても鮮やかな嚴冬の夕べの入り目、その輝きに陰鬱なものは皆清々としてく
 る様で、新しい神秘、新しい思想が、夕陽の光線とともに動きでる様な不思議
 な、幻影の様な氣持がする。斯う云ふ夕榮に包まれた市街を辿つて、何時しか
 私の足はミルレルの珈琲店の前に向つた。その折私の眼前に……老人と犬。
 之れを見た瞬時、私の心臓は可厭な感じて縮みあがつた。

私は神秘家ではない。前兆や占ひやを頭から信ぜぬ。だが一生涯のうちには
 全く説明する事の出来ない神秘に幾度か出遇す。例へば此の老人と犬ともそれ
 だ。何故私はあの時老人に出遇すと直ぐに其の晩自分が何か異常な事に遭遇し
 さうな感じがしたのだらう、だが私は病氣であつた。身は既に悪い咳が出始め
 たので引越さねばならぬと云ふ病人である。病的な感じには得て欺かれ易いも
 のである。

老人は棒のやうに歩く。足を折らない。春は屈めた儘だ。ゆつくりゆつくり
 歩道の碧石を杖で叩いて弱々しく行く。禿頭にちよつびり淡黄色とも灰白色と
 もつかぬ髪の毛。八十歳位な顔付だ。ボロボロの破れ外套と、若い二十歳頃か
 ら被つたらしい圓い帽子、看守の眼を透れて抜け出だした氣狂そつくり、
 んまい仕掛の様に無意味に動く。瘦せて骨の上へ唯皮だけへばり附いて居る。
 眼の周圍が蒼く縁取られて、大きく見開いたまゝ、どんより曇つて居る。直ぐ前
 の方を凝乎と見詰めたまゝ、傍眼もしなければ、第一視て居るのか、たゞ映つ
 て居るばかりかわからぬ。

誰も面倒を見て呉れる人のない一生を一人ぼつちで過す老人かしらむ。

此の老人はミルレルの珈琲店へ來始めたのは最近のことである。何處からと
 もわからず變ふやうにやつて來る。必ず犬を連れてる。

あの犬は何だらう。老人に影のやうに沿つて居る。メフィストが食付いて居

るのではないか一體何のために、珈琲店に来るんだらう。此の老人と此の犬とは屹度不思議な運命で繋がれて居るんだ。あの毛の殆んど脱け落ちた、尻尾の剥げた、耳の長い奴、此の魔物のやうな二つのものが街を動く時、二人の歩調までが呼吸を合はせて居るやうで、しかも二人とも同じやうに『老けた。老けた。俺達は全く老けた。』

と呟いて居る様な氣持がする。

此の老人が珈琲店の扉を開けると、眞直に暖爐の傍へ通つて、其處で椅子に腰をおろす。若しその暖爐の傍の席が塞がつて居る時は、彼はその占領者に向ひあつて、怪訝な鈍よりした愚かしい顔をして少時突つたつて、如何にも不審に堪へない様な風をして、他の隅の窓近くに行く。そして三四時間と云ふもの其儘凝乎と身動きもせない。聲も出たぬ、新聞をとらうともせぬ、唯眼一つばい見聞いた儘である。

斯うして犬と老人は、何か或る神秘的な義務でも果すかの様に、晩の星が輝くと珈琲店に現はれる。珈琲店の客は汚物でも吐きかける様に老人を嫌つた。が、老人自身は其麼ことにはちつとも氣がつかかなかつた。

強いアンシュ酒の香は此の珈琲店に満ちて居る。工場的主人や、錠前屋、パン屋、ペンキ屋、帽子屋、馬具屋、いろんなものが集つて来る。主人が獨逸人だから、客も多くは獨逸からこぼれ合つて来たもので、獨逸新聞もとつてある。私はその店に露西亞の雑誌を読みに行ったものの、絶えず何の意味で私は斯麼カツフエなどに入入りするのか、馬鹿々々しく思ひながらも来て居つた。

其の晩も無論此の老人と同時位に私は珈琲店に来た、そして半時間も居睡をした。するうち酷く悪寒を感じたので、歸らねばならぬと思ひながら、躊躇して居る瞬間に、私の足をとどめる現象が起つて来た。

それはアダムと云ふ商人と、此の怪老人との瞰み合ひの惨じい光景である。

アダムと云ふのは背の低いまるまると肥太つた、そして頗る清楚とした獨逸人で、ピンと張つた、糊の硬いカラをつけた、素的に赤い顔をした男、しきりにブンシユを飲んでゐたが、ふと頭を擧げて見ると老人の凝とした視線が自分の上に落ちてゐる。彼は獨逸紳士の通有性として怒つぽい。短氣だ。まじまじと無遠慮に眺められるのを非常に侮辱されたと思ひ、胸にむかむかと不快な念が湧きあがつたが、無理にそれを壓へて黙つて新聞で顔を蔽ふた。だが、到頭我慢しきれないで、二分程経つてから怪訝し氣に新聞の蔭からチラと覗いて見た。と、相變らず凝つと見据えた老人の執拗い視線が眼に付いた。

斯慶事が三四度繰り返されるうち、アダムは突然手の新聞を投げつけてステツキで力任せに叩いたそしてブンシユ酒に酔のまはつた眞赤な顔をしながら、血ばした小さい眼で、眼球が突出する程に鋭く老人を睨み返した。決闘する野獸の様に睨み合ふ。何方が早く羞むで眼伏するか、アダムは全身に力を漲らせ

ながら、ステツキで床を叩く、客は一樣に此の神秘的な喜劇的事件に注目した。しかし到底アダムは老人に敵對できさうにも無い。とうたらガミガミ怒鳴りだして。

『何故私を見詰めるんです。』

と獨逸語で一矢を放つたが、老人には一向通ぜぬ。アダムが什麼に怒氣を罩めて種々に叫んで見ても、老人は身じろき一つしなかつた。するうち客の一同は此の老人に對して不快の眩きを起した。で珈琲店の主人のミルレルが、此の聲の様な老人の目の眞近に身を屈めて

「アダムさんがさうじろく見ないで下さいと願つてゐます」と大聲を出した此の聲に老人はひよいと機械的にミルレルを眺めたが、刹那、今まで凝と動かなかつた彼の顔に一種の悸々した思ひと、不安な胸騒ぎの徴候が崩した。間違つて坐つた席を追立てられる不幸者の惨めな微笑、それは哀れつぽい笑方をし

て、聽て、ガタ／＼^{みぶるい}身震ひをしながら、そ／＼と杖をたよりに立ちあがりかけた。が如何にも此の惨を極めた哀れな光景に、居合せた人々の心には憐憫の感が起つて来た。老人の身にとつては決して人を辱めるところの騒ぎぢやない、却つて彼自身が絶えず乞食のやうに至る所から追拂はれるに對して皆が同情の感を深くした。老人はしばらく出ず様な聲で悲しく

『アゾールカー、アゾールカー、』

彼は足もとの板の間に身動きもせずに横になつて、兩の前足で面を蔽つて居る犬を呼び出した。

同情心のある人の善いミルレルは老人をなだめやうとしたが、老人の口からたゞ悲しく

『アゾールカー、アゾールカー』

けれどもアゾルカは身動きもせぬ。震へる手で杖を持つて犬を揺振つて見た

が犬は依然としてその儘である。聽て杖が老人の手からぱつたりと落ちた。彼は身を屈めて跪いた。兩手でアゾルカの顔を上げた。不幸なアゾルカよ。彼は死んで居たのであつた。饑餓のためか。老衰のためか。己が主人の足もとで死ぬ間に死んで了つた。老人はしばらく此の忠僕であり親友であつた犬の屍を見守つて居たが、聽て自分の蒼ざめた顔を、犬の死顔にピッタリ押し着けた。此の刹那、賑かな珈琲店が森として沈黙になる。私達は皆心から動かされた。……惡寒に襲はれたやうに老人はぶる／＼と顫へて居る。

『剝製にでもしたらいいだらう』

と云ひだした。が老人は少しも解らないといつた風で、依然として身體を、ぶる／＼と顫はせて居た。

『お待ちなさい。！上等コニヤック一杯お飲んなさい』とミルレルは此の神秘

的な老人が今や逃げ出さうとするのを見て叫んだ。

老人の手は機械のやうに動いて盃にコニヤツクを受けたが、手はぶる／＼顫えて居た。溢れて、唇に行くまでには一滴も無くなつてしまつた。やがて一種の變な調子迷れの微笑を浮かべながらアゾルカを其處に取残したまゝ、速てた不揃な足取りで珈琲店から出た。皆屹驚して立上つた。叫び聲が聞こえた。

老人が珈琲店を出て暫らくすると、やがて私は何處までも此の老人を迫及せずには置かない決心で、急いでその跡を辿つて行つて見ると、老人は塀と家とで形造られた薄暗い片隅で、歩道の板敷の上に坐つて、茫然と肘を膝の上に衝いたまま両手で頭を支へて居る。私はズカズカとその傍に行つて、

『お爺さん。アゾルカの事は断念めなさい。さあ、私がお宅までお伴してあげませう。御安心なさい。今すぐに車夫が來ます、御住所は何處です。』

老人は黙つてゐたが、突然私の手を握つて、『切ない！』と嘔れた聲。

『切ない！』切ない！』

として立ちかけやうとしては倒れた。聲は断續しながら

『ワシリエフスキイ島の……第六區……第……六區……です……』
たゞそれつきり云つた丈で黙つて居る。しかし老人の辿つた道は、ワシリエフスキイ島の方向とは全く反對だ。方角違ひである。と思ふうち彼の両手は死んだやうにだらりと垂れ下がつた。彼の顔を覗いて見ると、觸つて見ると、既う死んで居る。突然世界が夢になつた様だ。

此の事件で私は種々心配したが、聽て老人の家を探して見ると、ワシリイ島ではなくて、死んだ其の場所からつひ二三歩傍のクルーゲン家の屋根裏にある一つの離れた住宅に住んでゐたのであつた。その住宅は一つの小さな應接間の窓のやうな三つの裂目のある天井の低い大きな室から成り立つて居た。彼は酷く貧乏して居た。家具といつては卓と二個の椅子と石のやうに硬い、そして所

々ぼろの喰み出て居る極く古ぼけた長椅子だけであつた。だが、それとても家主の持物らしかつた。暖爐は見た處、もう長いこと焚きつけられなかつたらしい。臘燭も矢張り見當らなかつた。私は今になつて眞面目に考へく見ると、老人が珈琲店へ行くのを思ひついたのは唯臘燭の光の傍に坐つてそして身體を温めたいのであつたのだ。

お金といつたら一文もなかつた。

机の中の身元證明書を見ると、外國生れて露西亞の臣籍に入つたイエレミヤスミットといふ七十八歳になる機械師であつた。卓の上には二冊の書籍——簡単な地理書と新約全書とがあるばかり。

「老人が死ぬ前にワシリエフスキイ島の第六區と云つたのは何の意であらう。ほんの謔言たはごとかしらむ。これはその時どうしても判らなかつた疑問である。

神秘的であつた老人スミット。私は彼の運命にひきいられるやうな氣持で

私が今まで探した貸家は之に限ると決めてしまつた。大きな室やの代りには馬鹿に天井が低く、頭がつかへさうに思はれたが、直ぐに慣れてしまつた。それに家が孤立してゐた事が氣に入つた。ただ此の上は室僕の事を心配するだけが残つてゐた——全く室僕なしでは生活は出来ないのだから。屋敷番は初めのうちは一日に一度つゞは私の所へ来て、何かと必要な用を足してくれる約束をした。だが私の心では、大方誰か老人のことを聞いて、そのうち訪ねて来るかも知れないと考へた。しかし五日も過ぎたのに誰も來なかつた。

二

此の一年間の事件と生活を私は何もかも書いて見たい。私は自傳小説を書くのだ。それだのに何んだつて這麼途中から切り出したんだらう。もつと始めのことにたちかへらねばならぬ。

私は故から遠く離れたN縣で生れた。両親は立派な人であつたが、私は生れて間もなく孤兒となつてしまつたのだ。イフメニエフと云ふ小地主の慈悲でその家に引きとられて育つたのだ。イフメニエフの家には小供はたつた一人私より三つ下の娘があつたばかり、娘の名はナターシャ、あゝ懐しいナターシャよ。私は今此の二十五歳になるが、お前のことを廻想すると涙か惨み出る程にやる瀬ない想がする。あゝ美しき黄金時代よ。二人は地主の園を逍遙つた事もあつた。濕つばい林、明るい野、まことに生活はわれわれにとつて最初から神祕的に誘惑的に現はれた。

私が大學に入る準備の爲めペテルブルクに行つた時は、私は十七歳で彼女は十五歳。私は別れる時何か非常に重大なことを言はうとして彼の女を側の方へ呼んだことがあつた。何うしたのか私の舌が物を言はせなかつた。勿論二人の話は辻褄が合はなかつた。たゞ泣いて別れた。

イフメニエフ老人は名門ではあつたが、もう長い間零落れて居る家に生れた人である。彼の領地としては生れた時百五十人扶持あつたが、二十歳で龍騎兵にとられて一寸順調に進むだのに骨牌遊びかるたあそびのために最後には馬まで賭けてしまつて一躍貧乏と云ふ有様だ。有名なお人好しで、村に歸つてからは努めて農事を勵むであつた。三十五歳の時アンナと云ふ貧乏士族の娘と結婚した。

一家の主人公としてイフメニエフは秀れた技倆を持つて居た。隣の地主等は彼の許に農事を學びに來た。數年たつて突然隣村の九百人扶持ほどの領地に、ペテルブルグからワルコフスキイと云ふ侯爵の地主が來た。此の地主。青春と云ふ程ではないが年若で、好男子で、鰥夫やもめであるところから、村の女達の興味を惹き、侯爵もまた頗る歓迎會などに臨むて愛嬌を振り蒔いた。侯爵が隣村に

来たのは、隣村で侯爵のために勤めて居る管理人たるさる獨逸人で、破廉恥にも収入を胡魔化したりなどした奴を放逐するためであつた。そしてその後釜をイフメニエフにと云ふ下心であつた。イフメニエフは秀れた地主で、極く正直な人間であると云ふ事は勿論些しも疑ふ餘地はなかつた。彼は最初は辭退した。が多額な俸給がアンナを誘惑した。侯爵の溢れるやうな愛嬌がとうとう凡てのわだかまり、撒き散らしてしまつた。聽てイフメニエフは侯爵の魅惑に非常に手懐いてしまひ。その上彼は何と云つても我が露西亞における好人物、無邪氣な善良なロマンチストで、侯爵に對しては殆んど滑稽な迄に忠勤を盡し、全心を舉げて信服してしまつた。彼夫婦にとつては、隣りの人達が口を揃へて侯爵を傲慢な、尊大な、血も涙もない利己主義一偏の人であると惡評するを、如何にも不思議の事に思つた位であつた。

四

侯爵にはアリョーシャと云ふ専門學校全科卒業の息子があつた。私は其の當時はベテルブルグの大學に居たのであるが、此のアリョーシャは女のやうに繊弱な神經質な美少年で同時に心のさばけた、高貴な情緒に富むて居て、親切で誠實で、義理深い様に見えた青年であつたが、侯爵は此の青年を浮氣息子として、田舎のイフメニエフ家に引きとつてしばらく教育してくれと望むて來たのである。曰く（我が最も善良にして敬愛するイフメニエフ、別けてもアンナ。私の此の浮氣息子を郷等の家庭に引きとつて田舎で種々な智識を與へ、彼を愛撫し、取別け輕薄な性質を矯め、人生に於て最も缺くべからざる有益にしに嚴格なる規律を鼓吹してくれるやうに）と信賴し、アリョーシャは聽てイフメニエフ家にとつて尊い偶像のやうにもて囃されだした。此若侯爵隨分聽聞もあつ

て、自分で或る時には、某伯爵夫人を父と同時に追ひ廻はつて到頭勝つた、そのため父の恐ろしい憤怒をうけたと云ふやうなことを、有頂天になつて、無邪氣な平直な態度で、甲高に笑ひながら話すのであつた。

その時ナターシヤは十歳。若侯爵と彼女との間に問題がなくてすまうか。果然種々な風聞が湧きおこつた。曰く、イフメニエフは若い侯爵の性質を呑み込んで、彼の弱點を利用する考だとか。娘ナターシヤが二十歳の青年を掌中に圓めてしまつたとか、父も母も見ぬ振をしながら二人の戀を護つてゐるとか、狡猾で自墮落なナターシヤは到頭此の青年の心を全く奪つて了つたとか、いろいろな噂が立つた。けれども之れは讒誣中傷である。當時ナターシヤは十歳ばかりの少女のやうに快活で無邪氣であつた。

けれども此の讒誣は益々悪結果を齎して來た。侯爵家とイフメニスフ家との間には疑惑がわだかまつた。いろんな告發人や證人が出て來て、遂々侯爵に説

いて、イフメニエフの多年の管理には少しも模範的な正直な所がないと云ふやうに信じさせた。そればかりか三年前森林を賣却する際イフメニエフは銀貨一萬二千ルウブリを自分の懐へ取つたことがある。そのことと對しては裁判に出しても極めて明瞭な法律上の證據を提出することが出来る、何故なら森林を賣るのに彼は侯爵から何ら法律上の委任を受けずに自分の一存でやつてしまつて後になつてから始めて侯爵に賣却必要を説いて、その森林の代價として實際得たよりも遙かに少ない金額を渡した——と、こんなことまで吹聴して遂に兩家の間は大破裂をした。裁判事に不馴なイフメニエフは、辯護人さへ依頼するこゝとが出来ず、直ぐに敗訴となつて財産は一切さし押へられてしまつた。あはれな物語である。イフメニエフ老人は何の罪もないのに棲みなれた故郷を出奔して、あの老齡で、ペテルスブルグで又新たに運命を開拓せねはならなかつたのである。

五

斯くしてイフメニエフ家はペテルブルグへ引越した。長い長い別離の後は私はナターシヤと邂逅した。此の四年間の別離の間私は絶えて彼女を忘れなかつた。私は其の頃始めて處女作を書いて、ワニアと云ふ私の名前は多少文壇に知られて居た。けれども勳章も官位も無い文士が什して老イフメニエフの大なる賞讃を購い得やうぞ。ある時ナターシヤは私に決して懶惰者や破落戸に零落れないやうにと誓はせた。ことに老アンナは種々思案にくれた。彼女の心では考へて見ると矢張私は伯爵でもなく、侯爵でも、羽振のいゝ宮さんでもなく、と云つて勳章を懸けた若い立派な高等官でもないのに氣づいた時二途に迷はねばならなかつた。「皆褒めそやしてはゐるが」と彼女は私の事を考へた。「何の爲めだか解りやしないわ。文士だとか詩人だとか……まあ一體文士つて何だらう。」

六

老婆のアンナは私とナターシヤを油断なく注意してゐたが、聴て彼女は私達を見逃したのだ。私達二人の間にはもう或る一言が信ひ交はされて居た。そして私はとうとうナターシヤが頭を垂れて唇を半ば明けながら殆ど囁やくやうに「え」と言つたのを聞いたのだ。だが老人等も何うやら感付いたらしかつた。アンナは久しいこと頭を振つてゐた。彼女は變に重苦しいやうな感じがしたのだ。彼女は私を信じなかつた。

『そりやね。成功は結構ですがね、ワーニヤさん』とアンナは言ふ『しかしね、急に成功すると云ふ譯には行きませんからね。それには何かしなくてはねえ。何うてせう？せめてあなたが何處かへ勤めてゐるといゝのだけれどねえ！』
『だが、俺はお前に言とくことがあるよ、ワーニヤ！』と老人は考へ抜いた揚

句言つた。『俺は自分でも見て気が付いてゐる。そして内々喜んでゐたくらゐだ。それはお前とナターシヤが……いやそんなことはまあいゝさ！いゝかね。ワ
ーニヤ、お前達二人はまだ極く若いのだ。アンナの言ふことは道理だ。もう
少し待たうぢやないか。お前はそりや才能がある男だ。いや非常に才能があ
る男だ……然し、最初世間がを前の事を騒いだほどの天才ではない。たゞ才
能があるだけだ。然らば、それはつまり銀行にあるお金ではなくて、たゞ才能
なのだ。それにお前等二人は貧乏者だ。まあ斯うして一年半か、せめて一年位
待つがよからう。もし成功してお前の身の上が固く決まれば其の時はお前のナ
ターシヤだ。お前が成功しなかつたなら其の時は自分で判断するがよからう、
お前は正直な男だからね。解つたかな！』

で此の事はそれつきりになつた。それが一年後には何うなつたらう。
然らうだ。恰度丸一年の後であつた。或日の夕方。私はイフメニエフ老人の家

に病める身に悶へ悩むでる心を抱いて、入つて入つた。そして殆ど失神状態にな
つて椅子の上にドサリと倒れた。老婆は飾り氣のない、ひどく狼狽したやうな
態度で私を見て、心のうちで、『アラまあ此の人がすんでの事でナターシヤの夫
にならうとしたのだよ。いやなこつた。』

七

晩禱に呼ぶ沈んだ鐘の音が響いた。老婆は十字を切つた。
私の愛するナターシヤは素早く室すばやから出た。私は何か好くないことがあるだ
らうと一種の豫感を抱いて彼の女の後を追うた。

八

彼女は黙つて早足に、頭を垂れたまま、私の方を見ないで歩いた。が街道を通

り過ぎて河岸通へ来ると彼女は急に立停つて。私の手を執つた。

『切ない！』と彼女は言つた。『胸が緊めつけられる様です……あ切ない。』

『ではお歸りなさいナターシヤさん』と私は吃驚しながら叫んだ。

『ワーニヤさん、あなたは私が全く家を出て了つたといふことが解らないのですか。私はお父さん達の處から逃げだして、もう何時までも家へは歸らないのですよ』

此の時既に親は互に不倶戴天の敵同士であるのにナターシヤとアリヨシヤとの不思議な戀は成り立つて居た。私達は悲しさうに頸垂れて河岸通を歩いた。私はナターシヤにいろいろ家に歸ることを薦めた。痛切に老イフメニエフ夫妻の淋しいことを説いたが、それはたゞ要するに無益な時機後れの言葉で、徒に彼女を酷く苦めるばかりであつた。そしてたゞ悲むばかりであつたが、私は麥稈帽を掴みながら、また彼女に説きはじめた。

『だがお聴きなさい。聴くことだけでも御聴きなさい。このことはまだ取返しがつきます。もつと他の方法で、全く違つた何等かの方法で仕遂げることが出来ます。家を出ないですみます。淋しい老父母を無限の悲しい淵に投げ込まないで済みます。何うしたらいいか私が教へてあげます。ナターシヤさんあなた方のことは皆私が引受けます。密會のことでも何もかも……唯家を出ないで下さい。私が仲に立つてあなた方の手紙を届けて上げます。何うして届けないことがあるのですか！その方が今の手段より、ずつといゝのです。私はそれを仕遂げることが出来ます。私はあなた方二人に役に立つてあげます。屹度今に役に立つと云ふことが判ります……ずれば皆な奇麗に無事に済んで了ひます。そしてあなた方はお互に思ふ通りに愛し合ふことが出来るのです……してお父さん達が争を止めたら……屹度止めます……其の時は……』

茲まで云ふと泣いて居たナターシヤは私の手を固く握りしめて涙のうちに微

笑を帯びて云つた。

『解りました。ワーニヤさん。有難う御座います。お人よしのワーニヤさん！
貴方は善良な正直な御方です！自分のことと云つたら一言も仰有らずに！私こそ最初に貴方お来たを棄てたのではありませんか。だのにあなたは何もかもお許し下すつて、唯私の幸福ばかりをお考へ下さるんですもの。私達の手紙の橋渡しをしてやらうとまで……』

彼の女は泣きだした、聽てしばらくたつと

『オヤ来た！』と私はあの遠くの方の河岸通を此方へやつて来るアリヨーシヤの婆を認めて叫んだ。ナターシヤはぶる／＼慄えて居たが、だんだん近づいて来る彼女の戀人に眼を離さず、急に私の手を突き放して彼の方へ駆け出した。

彼の方でも歩を速めた。一分の後には最う彼女は愛の抱擁をうけた。街道とほりには私達のほか誰も居なかつた。彼等は接吻したり笑つたりした。ナターシヤは

笑ふのと泣くのと一緒いっしょであつた。まるで久しい別離の後に遇つたやうに。

彼女の蒼白あざむめた頬はほんのりと赤らんでゐた。熱中したかのやう……アリヨーシヤは不圖私の居るのに氣が附いて直ぐ私の方に近寄つて来た。

九

アリヨーシヤは私の戀の敵である。そして私は一度も彼を愛することが出来なかつたのを今になつて後悔する。彼を愛し得なかつたのは恐らく彼を知つて居るものうちで私一人きりであつたらう。彼は脊の高い、スラリとした優男で、小さな紅らんだ唇は、何時も何となく眞面目に結んで居た。それだけに彼の唇に不意に現はれた微笑は思ひ掛けなく、そして魅力を含んで居た。で一度彼の無邪氣な卒直な微笑に接しては何んな氣持になつてゐる人でも彼と同じ微笑を以つて彼に答へないでは居られない様な緩かな要求を感ずるのであつた。

彼は着飾つてはゐなかつたが、何時も華美やかであつた。

私は此の若い侯爵の兩手を把つて強く握つた。

「私は彼等二人に、彼等の父は今裁判所で争つて居ることを始め、此の戀の運命の甚だ悲むべきである事を説いて聴かせた。彼等も頻りに煩悶を續けて行くばかり、けれども父侯爵も必ずナターシャを容れることがあらうとはアリョーシャが期待して居る事であつた。

『父がもしナターシャを知つた時は、何んなに彼女を愛するでせう。彼女は何んなに皆を驚かせるでせう。彼等は一度だつて斯んな女を見たことがないので父は彼女のことをたい譯もなく悪女だと思つてゐるのです。彼女の名譽を恢復するのは私の義務です。私はそれを屹度します！あゝナターシャ！父はお前を愛するだらう。誰だつてお前を愛さないやうな人は一人もありやしない。』
ナターシャはたゞ死人のやうに蒼ざめてゐた。一種の失神状態にある。魅て

アリョーシャの叫聲が急に彼女を呼び覺ましたかの様に、ハツと我に歸つて、あたりを見廻して、忽ち私の方に駈寄つた。彼女はアリョーシャには秘密であるかのやうに手早く隠袋から手紙を出して私に渡した。それは兩親への手紙であつた。そして凝と私を見た。その眼差の絶望の色、今始めて自分の行爲の怖しいと云ふことを感じたのだと解つた。その刹那に昏倒してしまつた。私は彼女を漸つと支へた。アリョーシャは吃驚して蒼くなつた。彼は彼女の額顚の邊を擦つたり手や唇に接吻したりした。漸く正氣に歸るとアリョーシャは自分の乗つて來た馬車が近くに居たのでそれを呼んだ。馬車に乗りながらナターシャは夢中になつて私は手を捉へた。と、熱い涙が私の指を傳つて流れた。馬車は動き出した。私の長いこと彼女を見送りながら、其處にぼんやり立盡した。此の瞬間に私の凡ての幸福は亡びて了つた。私の生活は二つに引裂かれて了つた。……よろ／＼とした歩調で私は先に來た道を老人等の方に引返した。あ

の失望せる老人等に何と云はうか、私の考へは死んでしまい、私の足は戦^ぶと縮み上つた……

私の幸福な歴史はこれだけであつた。斯うして私の愛は終を告げた。扱て今は前の途断れた話に立戻らう。

十

スミットが死んでから五日後に私は彼の住んで居た空家へ移つた。その日、空^{そら}はどんよりとして寒^{さむ}く、雨交りの雲^{みぞれ}が降つてゐた。何となく暗^{くら}い壁^{かべ}の邊^{へん}からスミットの姿が幻影の様に浮いて出る様な氣持がする。私は此の暗惨な部屋で長編小説を書かうかと思ひながら、又見まはすと。扉のあたりにスミットが睨^{まは}つて居る様な顔をして幻影^{まぼろし}になつて現はれて來さう。凝つと見ると扉が音も無く開いて。そこへバツト明るく十二三歳の少女が現はれた。その顔はまるで

今しも重い病の床から起きて來たばかりのやうに瘦せて蒼白かつた。

『私の祖父^{ぢい}さんは何處でせう?』と彼女はやがて胸か咽喉かを病んでも居るやうな辛つと聞こえる位の皺^{しわ}皺^{しわ}聲^{こゑ}で訊いた。

『お前の祖父さんか?あの人はもう亡くなつたんぢやないの——』

『アゾールカも矢張り死んだの?』

『然らさう。アゾールカも矢張り死んだよ。』

と私は答へた。そして私は彼の女の問を變に思つた。さもアゾールカは必ず老人と一緒に死ぬといふことを少女は確信してゐたかのやうであつたから。

此の少女は儘にスミットの孫娘であらう。私はさう思ひ定める刹那、少女は顔を壁の方へ向けてしく、と聲を立てずに泣いてゐた。

『おい何うしてお前は怖がるのだ?』と私は言つた『お前をひどく吃驚させたのは私が悪^{わる}かつた。お祖父^{ぢい}さんは死ぬ時にお前のことを言つて居たよ。それが

お祖父さんの最後の言葉だつたよ。……私の處には本が残つて居る。お前のに違ひないが、お前は何と云ふ名だね、何處に住んでゐるのだね？老人はワシリエフスキ島の第六區とか云つたが……』

私が斯う言ひだすや否や彼女は宛も私が彼女の住んでゐる處を知つてゐるのを吃驚したやうに、瘦せた骨ばかりの両手で私を突き退けて、階級を下へ駆け降りた。私はその後を追つた。が彼女は影を消してしまつた。あだかも幽霊が影を消す如であつた。外は夜の闇で暗かつた。

十一

私が少女の影を追つて、じめくした泥濘の大通りに出た時、突然頭を垂れて何か深く物思ひに沈みながら急がしまうに足早やに歩いて來た一人の通行人に出遇した。それがイフメニエフ老人であつたので、私は非常な吃驚した。其

夜は私にとつては待ち設けない奇遇の夜であつた。私は老人が三日前にひどく病んだのを知つて居た。だのに今突然こん廢通りの濕ぼつたい處で彼を見受けたのだ。それに彼は今まで一度も夜分は出なかつた。そしてナターシャが出奔してから半年ばかりこのかた全く家にばかり閉ぢ籠つてゐた筈であつた。

私は老人と一所に、ナターシャの家出の後の淋しい心を語り合ひながら行くうち、寒い夜空にたつた一人の歳か八歳ばかりの乞食娘がシヨンボリと立つて居た。それを見るとイフメニエフ老人は銀貨を二つ三つ取出して

『キリストはお前を護つて下さるだらう……娘さん！天使もお前を護つて下さるだらう！』

と云つてそれを渡した。そして幾度か慄えてゐる手で憐れな少女に十字を切つた。が急に私が其處に居て彼のすることを見て居ると氣づいて、顔を擧めて『かういふことを私は見るに忍びないよ、ワーニャ』と長い沈黙の後に斯う言

つた。「此の娘の様な小さな罪もない者が路頭に寒さで凍えてゐるとは何たることだらう……それと云ふのも皆呪はれた父や母の所爲なのだ。ひどく不仕合せな御母さんでもなければ誰があんな小兒をあんな恐しい所へ出すものか……吃度老婆自身は病人なのだ。そして……ウム！侯爵の子供とは違ふわい！ワーニヤ。世の中には……侯爵の子供でないのが實に澤山あるのだ——
……ウム——」

彼は一寸の間何か當惑したやうに黙つてゐた。

「俺はなあワーニヤ、アンナに斯ういふ約束をしたよ……つまり小さな兒を家に貰ひ入れやうといふのだ。解つたかい。そうでないと俺等老夫婦ばかりでは怠屈だからな。……だがアンナは何うしたのか反對し始めたのさ。俺からと思はせないで、お前から云ふやうにしてな……彼女に勸めてくれ……實は俺は婆さんの爲めに然うしてやりたいのだ。彼女だつて一人つきりて居る

よりか繕しからうさ。だがこんなことはみんな臆言さ！おい、ワーニヤ、一歩いてゐては家まで却々あるから辻馬車に乗らう。まだ大分ある。婆さんが待ちあぐんで居るだらう……」

私達がアンナの所へ着いたのは七時半であつた。

十二

私は直ぐに自分の知つて居る限りを皆アンナに話した。彼女には私は何時もすつかり打明けて居た。私はナターシヤとマリとの間に實際に隔りが出来たと、そしてそれは以前の彼等の不和より一層重大である話を話した。

「悪漢はナターシヤを棄てゝ了つたんですか。」
とアンナは絶叫した。

これから私はまた昨日ナターシヤが私に手紙で、何うか今夜の九時に來て呉

れと書いて寄越したので、私は今日老人の處へ来るつもりではなかつたと云ふことまで打ちあけた。ナターシヤの手紙では九時と云ふ今夜の時間まで定めてあるので、まだその餘裕があるが私は一刻も早く行かねばならぬと話すと

『お出でなさい、屹度お出なさい』とアンナ老婆はせきたてた。

アンナ老婆の様子を見ると、どうやら自分で悪漢だとか、無神経な馬鹿息子だとか呼んで居るアリヨシヤが遂にはナターシヤと幸福な結婚をし、ワルコフスキイ侯爵もそれを許すだらうと云ふ、例の女らしい考があることは明だ。アリヨシヤのことを

『彼けでれ、した意氣地なしの子供です。それでゐて残酷なんですよ。ろくな教育も受けなかつたのであん麼浮つ調子な人間が出来たのです。他にいゝのが出来た爲めナターシヤを棄てるのですつて。ほんとに何と云ふ事でせう。娘はどうなるのでせう。』

と云つては全心の希望をあげて娘を待つて居るやうでもある。イフメニエフ老人の方は頑固に絶対に娘を許さないのであるが、アンナは何とかして宥恕の條件を見つけたしたいとして居る。丁度イフチニエフが居ない折りにアンナは私にホロリとした調子で

『私はねワニーヤさん、ほんとに不仕合せて、夜晝泣き通して居ます……私は良人に赦するやうに遠まわしに言はうとして口を出したのは幾度だか知れませんが。父親が呪ふ様では神様だつて罰するでせう。こんなに毎日恐しさにびくびく慄へながら生きて居るのですよ。私は詳しく聞いた事があるのですが、アリヨシヤの父の侯爵さんはある伯爵夫人とおかした關係になつて居るんですつて。伯爵夫人はずつと以前から侯爵が自分と結婚しないといつて侯爵を責めて居たさうですよ。だけど侯爵は何時もそれを旨く言い逃れてゐたんですつて。してその伯爵夫人といふのはまだ自分の夫の生きてゐた頃から醜聞を流した女

ださうですよ。夫が亡くなると夫人は外國へ行つて、しよつちう伊太利人や佛蘭西人を呼んで、それからある男爵とかを丸めて了つたんですつて。そこへワシコフスキイ侯爵が引掛つたんださうですよ。處がね夫人の繼子に當る、最初の夫であつた請負師の娘がだんだん大きくなつたのです。して繼母の伯爵夫人がすつかり金を使ひ潰して了つたのです。そのうち繼娘のカテクナは年頃になつて、父の請負師が彼女の爲めに銀行へ預けておいた二百萬ルウブルも殖へて、今では彼女は三百萬ルウブリからの財産を持つてゐると云ふことです。それで侯爵はアリヨシヤを彼女に結婚させやうと狙つてゐるんださうです。ほんとに抜目がないぢやありませんか。それに侯爵家の親戚に當る、あの有名な宮中のお役人の伯爵といふ人が矢張り承諾したんですつて。何しろ三百萬ルウブルと云へば笑談ごとではありませんからね。……しかしナターシヤの方が餘程アリヨシヤにはいゝ配遇ですよ。あの女は高が請負師の娘で、不義な侯爵と

伯爵夫人とが、カテリナは無邪氣だしアリヨシヤは馬鹿者ですから、結婚させ彼達が後見人になれば、その時はお金が出来ると云ふものなんですそんな狡猾い考へからの結婚です。ナタシヤは身分が違ひます。ナタシヤは貴族の家に生れた娘です。門閥の姫様です。私はお前さんに云ふのを忘れたが、うちの老爺さんが昨日鍵のかゝつた小櫃をあけたのですよ。するとその中にあつた系圖で私共イフメニエフ家はイラス雷帝の時にもう貴族だつたのですつて……と云つて娘の身に輝きをつけやうとするかと思へば又

『お前さん憶えてゐるか居ないか知りませんが、私の所に記念に造つた金被せの小さなメダルがあるんですよ。そのなかにナタシヤが八歳頃の可愛い小女姿の肖像が入れてあるのです。私は彼女にキッスするやうに、此の頃は思ふさま其の肖像にキッスし、夜になると十字を切つてやるのですよ。たつた一人の時はずつと彼女に尋ねるのです。そして宛も彼女が返辭をしたかの様に、

またそれからそれと尋ねるのでした。私は話すのさへ苦しいのです。私は彼人がメタルのことに気が付かずに居るのを喜んでみました。所がお前さん、昨日の朝になつて見るとメタルが無いぢやありませんか、紐だけがぶら／＼してゐるのですよ。屹度あの爺さんが頑強^{まっつ}い心で、ちぎつて投げたんですよ』
 と老婆はひどく泣き出した。それから又気がついたやうに
 『お爺^{ぢい}さんは又孤兒を養育するなつて云つたんでせう。孤兒なんか眞平ですよ。そんな子供を連れて來たら、私達の苦しい運命や不幸を思ひ出させる計りですよ。だが何だつて彼の人は孤兒のことなんか考へたんでせう。シツ！、來ましたよ、後で話して下さい。……お前さん今夜もう九時に近い。ナタシヤにあつて下さい。そして明日來てすつかり私に打ちあけて下さいね。ね。明日來るのを忘れないで頂戴……』

十三

老人は歸つて來た。そして私の顔を見ると氣をイラ々々させながら、これからシベリアに移住する。アンナにもついて來いなど、物凄い見幕で、怒鳴つたり呪つたりする。これは勿論ワルスコフスキイとの訴訟事件に仕うしても勝利を得られないからだ。あはたゞしくポケットから書類を探りださうとする刹那、種々なものを掴むだイフメニエフの手から、不圖、卓子^{かど}の上^{ていぶる}に何かカチンと音がして重さうに落ちたものがあつた。……アンナはあつと叫んだ。それは例の失くなつたメタルであつた。

老人はカツと逆上せて頬が眞赤になつた。
 アンナは心に思つた。老人はメタルを拾つて、自分がそれを見つけたの喜んで、嬉しさのあまり夢中になつて、嫉妬深くもそれを皆の眼に觸れないやう

に自分の懐に隠したに違ひない。そして皆から離れて唯一人になつた時彼は無限の愛情を籠めて自分の最愛の娘の顔に竊と見入つてゐたのだらう——見ても見ても見飽きなかつたらう……と。でアンナは

『まあ、あなた、あなただつて矢張り彼女を可愛がつてお出ぢやありませんか！』

が此の言葉のために老人の眼は怒の色に血走つて

『何時までも、何時までも、俺は呪つてやる！』

と云つてメダルを力任せに板の間の上に投げつけて、氣でも狂つた様に足で蹂躪つた。

『あらまあ！』と老婆は叫んだ。『彼女を、彼女を！私のナターシヤを！彼女の顔を足で踏むなんて！足で！この亂暴者、無情者、酷たらしい強情ツ張！』妻の叫び聲を聞くと、夢中になつて居た老人は、自分のしたことが怖しくな

つた。急に彼は板の間からメダルを拾ひ上げて。室の外へ駈け出した。が二足歩いて彼はバタリと跪いて、自分の前にあつた長椅子に掴つたまゝぐつたり、力なさうに首垂れて了つた。

彼は女子供の様に泣き喚いた。慟哭は張裂けるやうに彼の胸に通つた。と老人の恐ろしい權幕は忽ち子供よりも弱々しくなつた。最早彼は呪ふことなどは出来なかつたそれどころか、今は誰憚らず、私達の居る前で、つい今まで蹂躪つた肖像を夢中になつて止め度もなく接吻するのであつた。恰度今まで長い間堪えて居た、娘に對する凡ての優しさ、凡ての愛情が今抑へ難い力で迸り出て、その激發の勢に彼の全身は破裂したかのやうであつた。

『彼女を赦して下さいな。ね。あなた赦して下さいよ！』

とアンナは良人の上に身を屈めて、彼を抱いて泣き喚いたが、老人はその泣き噎枯れた聲の底に尙ほも

『いや、いや、決して、何時までも!』

十四

私は晩く九時頃にナターシヤを訪ねた。彼女の借住居は最初は小ジムマリとした立派なものであつたが、アリョーシヤのだらしない生活の結果は糊口の資もつきて今は汚らしい貸家の五階に棲むで居る。アリョーシヤの父は彼を未來の花嫁カテリナの處につれて行き、彼女の氣に入るやうに努めることを勸めて威嚇したり、賺したりしたが、遂には容易と譲すことの出来ない決心があるのだと感じて心を痛めた。

十五

私が入つた時ナターシヤは一人つきりであつた。

アリョーシヤはもう今夜で五日間彼女の許に來なかつたとのこと、彼女は詩集を読み、サモワルを沸騰らせて淋しい五日間を過ごした。私は彼女に會ふと先づあの老人達の家であつた出來事、特にあのメタルの一件を細かに話すと、彼女はたゞしみじみと泣きいるのであつた。聽て

『ワーニヤさん』と、彼は微かな聲で言つた。『私はあなたを或る用事で呼び申したんですが、』

『それは何ですか?』

『私は彼人と別れるのです。』

と云つてナターシヤは現在の生活を變へたいことを私に相談しかけて來た。けれどもこれまで幾度彼女は這麼ことを云つて、それをなさないで済まして居た。そして今夜ナターシヤが私を呼んだのは、屹度今頃アリョーシヤの行つて居る處だと察せられる「彼處」に私と二人で行きたいと云ふことであらう。

『ねえ、ワニーヤさん。もう五日間と云ふもの毎日毎日……寝ねても起きても、夢にまでしよつちう彼人のことばかり思つて居るのですよ。さあ参りませう。』^{おとこ}「彼處」に私を連れてつて下さいな』

『もうお止しなさいナターシヤさん。』

するうち玄関の處で物を争ふやうな響がする。當のアリョーシヤがやつて来たらしい。ナターシヤは身を物の蔭にかくしてしまつた。竊つと戸を開けて悻々室のなかに這つて来たアリョーシヤは、不圖彼の戀人ナターシヤが戸柵と窓との間の隅の方に居るのを見た。彼女は其處に隠れたつもりでぢつと身動きもせず立つて居た。私はあの時のことを思ふと、今でも笑はずには居られない。アリョーシヤは靜に氣をつけながら、彼女に近寄つた。

『ナターシヤお前どうしたの、今日は、ナターシヤ！』と彼は一種の驚きを抱いて彼女を見ながら云つた。

『何でもな のよ……私何うもしませんわ』
『ナターシヤ、お聴き……』とアリョーシヤは自分が五日間来なかつたのを辯解しやうとすると、

『まあそれが何の爲めてせう？』とナターシヤは云つた。『いえ。いえ。そんなことはいりませんよ……それよりも握手しませう……それでいゝのよ……何時ものやうにね……』と彼女は隅の方から出て来た。頬にはさつと赤味が潮して居た。

彼女は羞しさうに又怖しさうに頸垂れてばかり居る。

『あゝ』と彼は嬉しさに叫んだ『若し私が全く悪かつたら、その後で彼女を見ることさへし得なかつたでせう！御覽なさい！御覽なさい！』と彼は私に向つて叫んだ。『彼は私を悪いと思つてゐます。しよつちう私に逆らつてゐます。逆らつて居る振りをします！私が五日間彼女の所へ来なかつたといつて、私が

許嫁の所に居たと云ふ噂があると云ふのです——がそれが今何うです。彼女はもう私を赦して呉れました。彼女は私に（握手しませう。それでもういゝのです）と言ひました。ナターシヤ！私のエンゼル！私は悪くはないのだよ。それを察しておくれ！私は些しも悪くはないよ！それどころか！それどころか！』

『だつて……だつて、あなたは今彼處に……今彼所からあなたを呼んだのでせう……だのに、何うしてあなたは此處へいらしたの？今、何……何時！』

『十時半だ！私は今彼處へ行つて来たのさ……だが病氣だと言つて来たのだ——此の五日間のうち私が自由になつて、彼等の手から離れることの出来たのは今日が始めてだつたよ。そしてお前の處へ来たのだ。ナターシヤ！そりや前にだつて來られるには來られたが、態と來なかつたのだ。唯今度といふ今度はお前に對して私は何にも悪くないのだ！何にも！』

ナターシヤは頭を擧げてアリヨシヤを見た……彼が彼女に答へた眼差のうちには眞實が溢れてゐた。アリヨシヤの顔は彼を信ぜずには居られない程嬉しさうに、正直さうに、また愉快さうであつた。二人は是迄這麼伸直りの場合によくしたやうに、今に叫んでお互に抱擁し合ふだらうと私は思つた。がナターシヤは恰も幸福の快感に打たれたかのやうに頭を胸に垂れて急に……静かに泣き出した、とアリヨシヤは堪え切れなくなつた。彼は彼女の足下に平伏した——彼女の手や足やに接吻した。彼はまるで發作でも起したかの様であつた。私は彼女に椅子を勧めた。彼女は腰を下ろした。その足はとめどもなく慄へてわなわなして居た。

第二編

一

アリヨシヤがナターシヤの許に來なかつた五日間は無論アリヨシヤ對カテリナの結婚問題からであつた。其の晩、アリヨシヤがナターシヤにカテリナと會合のことを話しかけるとナターシヤは興奮して

『あなたカテリナに何うお話ししたの、それをすつかり話して下さいよ!』

『私は二時間と云ふもの彼女と二人つきりであつたので非常に都合がよかつた。私は率直に彼女に言つて聞かしたよ。カテリナさん周囲では我々二人を結婚させやうとして居るけれども到底不成立ですよ。私は心のうちに彼女に對するあらゆる同情を持つて居ると云ふこと、それから一人彼女のみが私を救ふこ

とが出来ると云ふことなど言つて聞かせましたよ。それから私は彼女に何もかも打明けたのさ。まあ考へてごらんナターシヤ、彼女はつまり私とお前との關係は何も知つて居なかつたのだよ。其の時彼女がどんなに感動したか、お前が見たらどうだつたらう!初めは吃驚して、眞着になつて了つたよ。私は彼女に私達の關係をすつかり話したのさ。お前が私のために自分の家を棄てたことから、私達が二人つきりて住んでゐること、私達が今何んなに苦しんで、凡てを恐れてゐるかといふこと、それから今は私達は彼女が味方になつてくれ、繼母に私の所へ嫁に行くのは厭だと直接言つてくれるやうに、彼女の助けを仰いで居ると云ふことをすつかり話したよ。ナターシヤ、私は其時お前の名を出して云つたよ。そしてそれが私達の救はれる道で、それより他には何うしやうもないといふことを話したのさ。すると彼は非常な好奇心と非常な同情とを抱いて熱心に聞いてゐたが、あゝ其の時の彼女の眼は何んなだつたらう!恰

度彼女の全心が眼一つに集つたかのやうであつた。彼れの眼はすつかり空色だよ。彼女は私が彼女を疑はなかつたのを私に感謝して、全力を盡して私を助けやうと約束したのだ。それからお前のことを訊き始めてね。是非お前と近付きになりたいと言つて、そしてお前を姉のやうに愛して居るから、お前も妹のやうに彼女を愛してくれるやうに傳へてくれと言つたよ。そして私が五日もお前の所へ行かないと聞いて直ぐに私をお前の所へ行けと急ぎ立てるのさ……」

「ナターシヤは感動した。アリヨシヤは尙ほも一種幽遠な興趣を覺えて居る様な態度で話しつづけた。

「ナターシヤ、私はね彼女とお互ひに兄妹となることを約束したよ、あゝ若しお前が彼女のことを知つたらな！彼女が華族の身でありながら、何麼に不仕合であるか、繼母の所にゐて自分の生活や自分の境遇を何んなに嫌つてゐるか、お前がそれを知つたら何うだらう！彼女は私を恐がつてゐるかのやうに、其の

事を明らかに言はなかつたが、私はある言葉で察したよ。ナターシヤ！彼女は何んなにお前に心を惹かれてゐたらう！そして彼女は何と云ふ心の善い女だらう！彼女と一緒にゐると気が軽くなるよ！お前達二人はお互に姉妹になつて、お互に愛し合ふやうに生れたのだ。私はそのことばかり考へてゐたよ。まつたくだよ。私はお前達二人と一緒にして、自分が其傍に居てお前達を眺めて居たらどんなによからうと思ふよ。變に取つてはいけないよ、ナターシヤ。私に彼女のことを話させてくれ。私はつまりお前とは彼女のことを話し、彼女とお前のことを話したいのだ。お前は私が誰よりも、彼女よりも、お前を愛して居ると云ふことを知つてゐるではないか……お前は私の凡^{ズベ}てだ！……」

「ナターシヤは黙つて優しく、何となく悲しきやうに彼を見て居た。彼の言葉がさも彼女の愛を唆ると同時に何物か彼女を苦しめたかのやうであつた。

『もう疾から、二週間も前から私はカーチャの價值を知つて居た』と彼は言ひ

續けた「私は毎晩彼女の處に行つたが、家へ歸りながらよくお前達二人のことを考へて、お前達をお互に比べて考へることがあつた。」

「一たい貴方はどちらの方がよかつたの、私達二人のうちで」とナタシヤは笑ひながら訊いた。

「或時はお前がいゝと思つた。或時は彼女がいゝと思つたよ。だが何時もお前の方がよかつたよ。私は彼と話して居る時は自分が何となくよくなつて、以前よりも慇巧に高尙になるやうな氣がするよ。然し明日だ！明日ですつかり決まつて了ふよ！」

「でも、あなたは彼女を可哀想だとは思ひませんか！彼女は貴方を愛してゐるではありませんか。あなたは自分でもそれに氣がついたと仰有つたではありませんか！」

「可哀想だよ、ナターシヤ！だが私達は三人してお互に愛し合ふやうになる

だらう。その時は……」

「その時は、『左様なら！』ですわ！」

とナターシヤは獨言のやうにそつと言つた。アリヨシヤは訝かしさうに彼女を見た。

が我々の話は不意に思ひ掛けないことで斷れた。玄關兼帯の台所の方に當つて誰か人の入つて来るやうな軽い氣合がした。暫くすると下女のマウラが戸を開けた。そしてアリヨシヤに竊然と合圖をして呼出した。私達は皆マウラの方に振り向いた。

「誰が今頃私を訪ねて來たのだらう？」とアリヨシヤは訝かしさうに私達を見ながら言つた、「今行くよ」

臺所には彼の父の馭者が立つてゐた。それは侯爵が家へ歸る途中、ナターシヤの家の前で車を停めて、彼女の所にアリヨシヤが居るか何うかを尋ねさせ

たのであつた。馭者はさう云つて直ぐ出て行つた。

『變だな！こんなことはまだ一度もなかつたのだが』とアリヨシヤは不安さうに私達を見廻しながら言つた。『一體何うしたんだらう？』

ナターシヤは心配さうに彼を見た。不圖マウラは私達の室の扉を開けた。

『侯爵様が御自分でいらつしやいました。』

と彼女は口早に云つて直ぐ引込んだ。

ナターシヤは眞蒼になつて、立上つた。急に彼女の眼は輝いた。彼女はそつと卓子テーブルに凭れて胸を騒がせながら思ひ掛けない客が入つて来る方の戸口を見詰めてゐた。

『ナターシヤ怖がつちやいけないよ。私がお前と一緒に居るから！私はお前を侮辱させないから』とアリヨシヤが吃驚びっくりしたが、氣を取り亂さずに矚まいた。戸は開いた。闕の上にワルコフスキイ侯爵が自身で現れた。

侯爵はつかつかとナターシヤに近づいて、彼女をまじまじと見詰めながら彼女に言つた。

『こんなに晩くなつてから、豫め何の通知もせず突然伺つたのは變でもあり、常規を逸してゐるやうにも思はれるでせうが、私は少くとも自分の行爲の變調を自覺してゐるといふことだけはあなたもお信じ下さるでせうね。私はまた何う云ふ方に對してゐるかといふことも存じてゐます。あなたが聰明で、寛大なお方だと云ふとも存じてゐます。私にもう十分だけお許し下さい。さうすればあなた御自身にも私といふものがお解りになつて、成程と首肯されるだらうと思ひます。』

侯爵は呻ではあつたが、力を入れて執拗いやうにかう言つた。

「お掛け下さいまし」とナターシャは言つたが、彼女はまだ最初の狼狽と稍々吃驚した感じが胸から消え去らなかつた。

侯爵は長い間止み間なく、種々なことを話した。特にアリョーシヤに向つて「お前が私を待ち切れずに私達に別れも告げないで立去ると直ぐ後からカテリナに加減が悪くなつたと伯爵夫人へ知らせて来たよ。夫人は直ぐ彼女の所へ駆け付けやうとしたが、其の時カテリナ自身が突然あたふたした非常に氣を取亂したやうな風で私達の所に入つて来たのだ。さうして彼女はお前の妻になることは出来ないと言つたよ。それからまた彼女は修道院に入るといふことや、お前が彼女に助けを求めたことや、お前がナターシャさんを愛してゐると打ち明けたことなども言つたのだ……」

と告げ、今度はナターシャに向つて

「今は自分の非を悟りましたが、私がアリョーシヤの爲めにカテリナを花嫁

にしやうと思つたのはまことに貪慾な耻しい沙汰でした。貴方の家は財産が無かつたし、カテリナには最氣と財産とがついて居たからのことです。私が自分の息子の妻として、望むでゐた理想的な處女をカテリナに見出した時は、私は何んなに喜んでせう。だが、私の喜びは遅かつたのです。彼にはもうあなたといふ別な勢力が深く根を張つて居たのです。そしてその勢力の根はずんずんアリョーシヤに立派な感化を與へました。その最も明かな證據には、今までは彼には全然無からうと思つて居た智慧の徴候を彼は今日突然私に示しました。それと同時に心情の極めて優雅なことを推察力とを示しました。彼は今回の最も困難な場合を切抜けるために最も確かな道を選んだのでした。彼は人の心の最も貴い力に訴へて、其の感動を呼び起したのです。其の力と云ふのはつまり悪を宥し、悪に酬ゆるに寛大の心を以つてする力です。彼は彼の爲めに辱められた人の力に頼つて、その人の助力を乞ふたのです。彼は彼を愛する女に向つ

ていきなり、お前には競争者があると打明けて、其の女の一生の誇りを破ると同時に、其の女をして競争者に同情を引き起させたのです。そして自分に對しても其の女から宥怒と無慾な友誼の約束を得たのです。相手を侮辱せず、斯うした思ひ切つた告白をするとは極賢い智者でさへ容易には出来ないことです。斯う云ふことは彼のやうな清い生々した善良な心にして始めて出来るのです。私ばナタリアさん。今日の彼の行動に對してあなたは一言の助言も與へなかつたと云ふことを信じてゐます。あなたは大方今始めて彼から凡てを聞いたのでせう。私の言ふ通りでせうね、ほんとでせう？

『あなたの仰有る通りです』と顔を熱らして、一種の感激にても打たれたやうに眼を變に輝かしながらナターシヤは答へた。侯爵の雄辯が大分影響したらしい。『私は五日ばかりアリオシヤさんには遇ひませんでした。と彼は言ひ足した。』それはみな彼人が自分て考へて、自分て實行したのです。』

侯爵は此の夜全く幸福に見えた。又侯爵はナターシヤに向つて、今ナターシヤの父のイフメニエフ家と侯爵家との間に蟠つて居る不快な事件も聽てはナターシヤの徳によつて目出度解決するであらうと云ふやうなことさへ意味ありげに云つて、更に土曜日の晩に再會を期しなから、歸り仕度にとりかゝつた。急に私の方に向いて

『や、私は實に幸福です！私は益々あなたの心が解つて參ります。だが……最う歸りませう！然し私はあなたと握手せずには歸れませんよ』

と云つて私の手を握り絞めながら
『御免下さい私達は今切れぬにお話したが……私はあなたとは度々御目に掛りました。一度はお互に引合されたこともありましたがね。私はあなたと舊交を温めるのが何んなに愉快か、それを話せずには茲を出られませんかよ。』
『さうですね。實際私はあなたにお目に掛つたことがありました。たしか昨

年輩侯爵の所て

『どうも失禮致しました。まつたく忘れてゐましたですけれど、此度は決して忘れませんから、どうぞさうお思召して下さい。今晚は私にとつて誠に記念の晩でした。私はあなたがナタリアさんと私の息子に取つて真心からの親友だといふことを、疾うから存じてゐます。私もあなた方三人に加つて、第四番目の仲間になりたいと思つて居ます。いゝでせう』

私は心のうちで、私の恩あるイフメニエフ老人の不倶戴天の敵である彼が、かく急に變化してくるのを何となく輕薄とも思ひながら

『それは私の大に望む所ですが、然今ちよつとお知己ちかづきになつたばかりで……』と云ふと。侯爵は

『ですが、あなたの今の御住所をお知らせ下さいませんか！何處に貴方はお住ひですか？私は是非伺ひたいのですが……』

『私は自分の處では應接致しかねます、少くとも當分のうちには』

『でも私は特別な例外を願ひたいのですが……』

私は例のスマिटツの幽霊の現れて來さうな壁を眼の前に描きながら

『若しあなたがお望みなら、何卒お出下さい。私も非常に満足です。私は――』

――通のクルゲンといふ人の家に住んでおります。』

『クルゲンの家ですか？』

彼は何か吃驚したやうに叫んだ。それでも一度握手して歸つた。

私達三人は全く呆氣に取られてゐた。が何となく萬事か幸福に解決して來るやうに思はれる。

明朝はアリョーツヤとも一度カテリナを訪ねて様子を見ることにし、私はイフメニエフ老人を訪ひ、そして又茲に落ちあふことに決めてその晩は分れた。家に歸つてから私は直ぐに衣服を脱いで、寢床に就いた。私の室の中は濕々

して墓穴のやうに暗かつた。私の胸にはいろんな變な思ひや感情が起つて、容易に眠付かれなかつた。

だが、其の時或る一人の男は自分の軟らかい寢床に眠入りながら、何んなにか嘲笑つた事だらう！然し其人は私達を嘲つて笑つたんだらうか！其麼ことのあるべき筈はない！

三

翌朝十時頃、イフメニエフ家に行かうと思つて、ワシリエフスキイ島へ急ぎながら家を出かけると。不意に戸口の所で昨日私を訪ねて來たスミツトの孫娘に出遇した。ぼろぼろの着物を纏つて、蒼い顔をして私の顔を見ると

『本を取りに來ました！』

と俯目になつて騒ぐやうに云つた。

『あゝ然うか。お前の本か、そらこれだ、持つてお出で！私はお前のためにこれをわざと取つておいたよ。』

と云つて私は例のスミツトの死後にあつた地理書と新約全書とをわたした。

此の娘は名を訊いても容易に云はず、僅にエレナと漏らしたばかり、何と云ふ家に住まつて居るかと聴いても、それは一言も語らなかつた。孤兒では無いかと云ふと微かに『ハイ』と答へた。

聽て私は急ぎたいから馬車に乗つて出かけることにし、此の哀れな少女をも島まで同車させてやつた。私はどうにかして此の少女の住所をつきとめてやりたい様な氣持ちがしたが、少女は

『どうぞ私の後をつけないで頂戴！私、あなたの所へ行きますから、屹度行きますから！行かれたら屹度行きますから。』

私は無性に好奇心に驅られた。私は彼女に隨いて入ることは止めにしたが、

兎に角彼女の入る家だけは屹度突き止めやうと思つた。私は其時一種の重苦しい、恐しい感じに囚はれてゐた。それは恰度あの珈琲店でアソルカが死んだ時に、彼女の祖父が私に與へたやうな感じであつた。

四

それとはなしに彼の少女の行衛に氣をつけて見ると、少女は或る小さな石造りの古い二階建て、薄汚ない、黄色い、ペンキで塗つた家にはいつた。と思ふと怒鳴り聲がはげしく聞こえる。

『この畜生、恩義知らず、胡瓜を買はせにやつたのにもう何處かで油を賣つてゐるんだ！昨夜もらんと懲らしてやつたのに、もう今日は逃げたりする。手前一體何處へ行くんだい。この淫奔女！何處へ行くんだ！白狀しないと絞め殺して了ふぞ』

とお内儀さんらしい聲で躍起になつてエレナを罵詈雑言して居る。私は近よつてその家の門を見ると鐵葉に「町女ブブノワ寓」と書いてある。今エレナを苛めて居るあの悪婆のやうな内儀さんは屹度此の町女ブブノワであらう。私はいきなりその中に飛び込んだ。

『何をあなたはなさるんです？ 何んだつてこんな可哀想な孤兒をそんなに酷く取扱ふのです！』と私は此の悪婆の手を捕へて云つた。

かうした見幕で争ひかゝる刹那、不意に消魂々しい、人の聲でないやうな叫び聲が響きわたつた。見ると失神したやうに突立つてゐたエレナが、急に恐ろしい不自然な叫聲を放つて地上にばつたり倒れた。恐ろしい痙攣に跪いて居る。髪を振り亂した娘や内儀さん達が下から上つて来てエレナを抱へて急いで二階へ運むて行つた。

『横死ばつて仕舞やがれ』と悪婆は彼女の後から叫んだ。『一月のうちに三度

も癪癪を起すなんて、失せやがれ畜生！」
 するうち此の貸家番が来て、私にあんなものに對手になるなと云つて外へ、私をつれだしてしまつた。私は頭を垂れてあの少女の運命を考へながら、歩いて居ると、ふと甲高な聲で私の名を呼ぶ人があつた。見ると私の前に可也立派な衣服を着た、其辨汚ならしい外套を引掛けて、汚れた帽子を被つて居る酔ばらつた男がひよろ／＼倒れさうになつて立つて居た。私はよく見入つた。彼は私に瞬きして、そして皮肉な笑ひを浮べた。

『解らないかね』

五

『やあ！君でしたかマスローボーエフ君』と私は不圖其男が中學時代の同窓であるのに気が付いて叫んだ。『や、奇遇だね！』

此の舊友は頗に私の文名について世辭を云つて居たが、聽てたつた二十分ていゝから料理屋で一所に呑まうと私に強ゐた。私も強られるまゝ料理屋に上つた。其時の話に、マスローボーエフは今探偵ぢやないが兎も角もこれに似たある仕事、一部は官の、一部は自分の爲めに仕事として、他の秘密を嗅ぎまはつて居ると打ちあけた。その話のうち

『近頃僕は或る侯爵に頼まれて、或る事件を調査したことがある。それを君に話してやらう。侯爵ともあらうものに、斯麼事件があるかと驚くよ、それから他に別な有夫姦の事件もある。其のうち僕の所に來給へ。斯ういふ種類の材料なら幾許でも供給しやう。まあ試みに書いて見たまへ……』

『して、その侯爵の苗字は何と云ふのかね？』と私は何となく心當りがあるやうな氣がするので訊いた。

『だが君に何必要がある？そりや、ワルコーフスキイさ。』

私は何だか胸騒ぎがした。

『マスロボーエフ君、僕は其の人のこととこれから度々君の所を訪ねるよ』

『さうか君が来たいなら幾度でも來給へ、話しながら出来るよ。だが、それは或點までだよ——いゝかね？それと信用と名譽——つまり職務上の信用といったやうなものを失つて了ふからね。』

『さうさ、信用の許す範囲内です。』

彼は私にその住所をさせて呉れた。そして別れた。

『ぢや行くかも知れないよ、屹度行くよ……』

六

私は晩くなつたのを懸念しながらも、彼と別れてからアンナ老婆の處に出かけた。丁度午後の二時頃、アンナは待つて待つて待ちあぐんで居る處であつた

私は彼女に昨日ナターシヤの許もとに起つたことをすつかり話した。老侯爵の訪問のこと、彼の悦ばしい申出のことを聞くと、老婆の悲しみは直に消えてしまつた。非常に悦んだ。まるで正體を失つて、十字を切つて、泣きながら聖像の前に打伏したり、私を抱いたりした。そしてすぐとイフメニエフの所に駈けて行つて彼に自分の喜びを話さうとした。私は辛やつと彼女を止めた。人の善い老婆さんはもう二十五年も夫と生活しながら、未だ彼をよく知らなかつた。彼女の女は今直ぐとナターシヤの所に行き度がつたが、私はイフメニエフ老人が大方彼女の行爲に賛成しないのみか、却つて之が爲めに事を破こすやうなことになるはしないかと云ふことを老婆に説いた。で辛やつと彼女は思ひ止まつた。

そして今度はナターシヤの方に行つた。

私の期待に反してナターシヤはどうしたものか沈んで居る。妙に笑つて見たり、泣きたいやうな表情をして居る。鹿爪らしい素氣ない風もする。どうして

も變だ。

アリヨシーシャが今朝来たとも云へば來なかつたとも云つて居る。何か私の來なかつた間に屹度ナターシャとアリヨシーシャとの間に、その戀愛の熱度を變激させるやうな事があつたとしか思はれぬ。

『ではあなた方は喧嘩でもしたのですか。』と私は吃驚して叫むだ。

『そんなことはありませんでした。唯だ私は少し鬱ふさいで居ました。すると彼人ははしやいて居たのが、急に測れて仕舞つて、素氣なく私と分れました。それで、私は彼人の後から使をやりました……あなたも今日御出で下さいね。ワーニヤさん。』

『何か事故じこさへなければ屹度來ます。』

『では何處どこに何か事故があるんですか？』

『よんどころない事があります。ですが多分來られませう。』

七

私はスミットの孫娘が、ブブノワと云ふ悪婆の爲に虐待されて居るのを思ふと妙に好奇心が濃りおこつて、どうしても、救助せざるには居られない。マスロボーエフ君の話によるとブブノワと云ふのは悪事を働く有名な女ださうだ。彼女は此の間も名家の娘を酷い目に合はせたと云ふ。エレナの運命はどうしても私の手によつて拓ひらいてやらねば何時までも暗い。

私は遂に彼女がブブノワに虐待されて居る最中に、ぐずぐずしないで直ぐとエレナの手を取つて、魔窟から連れ出した。後のことは何うなつたか知らなかつた。私はマスロボーエフと計つて、悪婆が手を出す事の暇もない程に極めて迅速に車にエレナを乗せて私の家に歸つた。

エレナは半死半生の體であつた。私は彼の女の着物を脱がせて、彼女を水で

拭いて、長椅子の上に寝せた。彼女は熱に浮かされ始めた。その蒼白めた顔、色の褪せた唇、又黒い一方に垂れかゝつた髪の毛、白粉、蔷薇色の靴、まだ何處か形の残つた着物など私は凝乎と眺めいつた。そしてとうとう此の嫌らしい事件の真相が解つた。不幸な少女よ。益々悪くなるばかりである。私は彼女の側を離れないやうにして、その晩はナターシヤの所へは行かないことにした。エレナは時々その長い睫毛を上げて私を見あげた。次第に夜は更けた。

八

朝から頭痛がする。眩暈めまいがする。どうしてもなほらぬ。強いて新鮮な空気を呼吸して見るが益々頭痛がする。しかし私はナターシヤの處に行つて來なければならなかつた。どうも彼女に就いて私は不安でならぬ。するとこの時エレナが私を呼んだやうなので振り向いて見ると

「あなたは出る時に私を閉ぢ込めないで頂戴」と、彼女は横の方に向いて指で長椅子の縁を擦りながら、さもその事に熱中して居といった風で言ひだした。『私はあなたの處から何處にも行かないから』
『よしエレナ承知したよ。だが、誰か他の人が來たら何うする。それもね誰が來るか解らないからね』

『では鍵を私に置いて行つて頂戴な。私内から閉めときますから。そして誰か叩いたらお留守ですつてさう言ひますよ』と、彼の女はさも「ほら、さうすれば何のことはないぢやありませんか」と云つたやうな顔をして居る。
て私はエレナに鍵を渡して、ナターシヤの所に行かうと起ち上つた。私は確にナターシヤの身に何かよくない事が起つたに違ひないが、前にも一度あつたやうに彼女は時の來るまで秘してゐるのだと思ひ込んだ。兎も角も彼女の所へ寄るのは一分間と云ふことに決めた。それでないと私と煩く思はれだらうから。

その通りであつた。彼女は私を不満さうな冷たい眼差で迎へたので直ぐそこを出なければならなかつたのだが私の足は縮み上つた。

「私はあなたの所へ一寸来たのです。ナターシャさん。私の所のお客を何うしやうかと云ふ、その相談に来たのです。」

私は口早にエレナの事をすっかり話した。私の心にはイフメニエフ老人が孤兒を養ひたいと云つたあの言葉を、若し實現するなら此のエレナは適任であると思つたからである更に語を足して

「エレナは何時も私の所からは何處へも行かないと言つて居るのです。それにあの老人達が彼女を何う取つて下さるか、それも分らないのです。ですが、あなたは何うです！あなたはお加減が悪いやうですね。」

と云つたがナターシャは只頭垂れて微かに瞬眄な返辭をするばかりであつた。長いこと私の前に立止つて、眞正面に暫くの間まじまじと私の眼を見詰めてゐ

た。その眼にはある決心と一種の強情と癡癡したやうな熱病らしい表情が現はれてゐた。

「あのね、ワニーヤさん」と彼女は言つた。「悪く思はないで下さい。そして私の所から歸つて下さい。あなたがゐるしやると困りますから……いえ……何でもありませんよ。みんな、みんな明日になれば解ります。だけど今は私一人であつたのですよ。え、ワニーヤさん今は出て行つて下さい。私はあなたに顔を合せるのがほんとに辛いのですよ！」

「ですが、せめて私にだけ話して下さいよ……」

「みんな、明日に……あゝ、ほんとに！ねえ、あなた出て行つて下さいませんか？」

私は出た。私はあまり吃驚したので何が何やら覚えてゐなかつた。例の女中のモウラは私の後から玄關に出て来た。

「何うしたの、怒つてるの？」と彼女は私に訊いた。「私もう彼女の傍へ行くのも怖いのですよ。」

「一體彼女は何うしたんだ？」

「ほゝ家の人がね、三日も顔を見せないのですよ。」

「なに、三日も」私は慌いしく訊いた。「だつて彼女はアリョーシヤが昨日の朝来て、それから晩にも来る筈だと昨日私に言つたよ」

「何が夜来るものですか！彼の男は朝だつて全く来はしませんでしたよ。ほんとに」昨日から顔を見せないのですよ。自分で昨日の朝来たと言つたんですか？」

「自分で言つたよ。」

「それぢやあの」とマウラは老人ながら言つた「あなたの前で来なかつたと打明けるのが厭な位みですから、餘程これが辛いんですよ。ねえあなた」

「一體まあ何うしたといふのだ」と私は叫んだ。

「そりやね、彼女には何うしていか解らないのですよ」と、マウラは手を擴げて言ひ續けた。「昨日私は二度まで彼男の所へ使ひにやられました、二度共途中から歸つて来ました。それで今日は私に口も利かないんですよ。せめてあなたでも彼男と遇つて下さればいゝのですが。私はもう彼女の所から離れられせんわ」

私は夢中になつて階段を下りた。

「晩には私共の所へお出でになりますか」とマウラは私に叫んだ。

「彼女の様子で」と、私は歩きながら答へた。「私はひよつとしたらお前の所へ様子を聞きに寄る、故障さへなければな。」

私は實際何かに私の心臓をどくんと打たれたやうに感じた。

十

私は眞直にアリョーシヤの所に出掛けた。が彼は留守であつた。私はいきなり部屋の中へ入つて置手紙を書いた

（アリョーシヤ君、君は氣でも狂つたのではないか。去る火曜日の夜、君の父上には自ら君の爲めにナターシヤの許に来て、彼女に君の妻となるやうに乞ふたではないか。そして君が其の乞ひを喜んだことは僕が證人です。然るに君の現在の行動が稍々奇怪であるといふことは君自身も認めるだらう。君はナターシヤに對して如何なることを爲してゐるか、解してゐますか？兎に角僕の此の手紙は君の行爲が、君の未來の妻たる者の前に甚だ不當な輕卒な行爲であることを思ひ起させるだらう。僕は君に教訓がましい事を云ふ權利のないことはよく承知してゐるが、然しそれは僕の意に介する所ではない。

二伸、此の手紙のことは彼女は何も知らない。また彼女が僕に君のことを言つたのでないことを念の爲め附加へておく。

急いで歸つて見るとイフメニエフ老人が私の許に来て居る。私の顔を見ると、『あのな、ワニーヤ、俺はお前に大變なお願があつて來たのだ。だが、其前に……俺は今自分で或る事情を話す必要があると思ふのだ……いや何も説明する程のことはないよ！解り切つたことだ！何のことはない、俺は侯爵に決闘を申込む積りなのだよ。それでな、お前に此の事を運んで貰つて、そして俺の介添人になつて貰ひたい』

聽けば例の裁判沙汰は、愈々の處においてもイフメニエフ老人の敗に歸し、有罪となり、近く一萬ルーブルを拂はんけりやならないのだ。老人は復讐の念に燃えたと居た。そしてナターシヤの結婚も根底から破壊してやると怒鳴りつゞけた。

「それからね、ワーニヤ、變なことを聞くやうだが、お前には金があるか？」
 「お金ですつて！」と私は吃驚して繰り返した。
 「さうだよ。俺はお前の住居……境遇……そんなことを見ると、何か他に臨時の費用が要りさうに思へる。でこゝに不取敢百五十ルブルある。第一回分として……」

何の爲めに私の處に金を置いて行くか、わからなかつたが、遺産でも譲るやうに金を私の前に置いた。

私の身體も脳髓も今は立つて居るに堪えられない程、苦しくなつた。頭痛がはげしくなつて、刻々にひどい眩暈が増して来る。でそのことをイフメニエフ老人につげると、老人は

「あゝ、御前の顔はだんだん蒼くなるよ。油断しちやいかん、ワーニヤ。氣を附けなくちやいけないよ！今日は何處へも出かけないかい。アンナにもお前の

様子を言つてやるよ。お醫者は要らないか？明日俺はお前の所へ来るよ。若し歩けさへすれば何うかして来るよ。さあ、もう寝たらいゝだらう……ぢやさやうなら」

と云つて家を出かけたが、寢臺上の憐れげなエレナを見やつて。

「さようなら娘さん。おや彼方おんちに向いてしまつたな！あのワーニヤ！そらもう五ルウブルやる。これはあの娘にやつてくれ。だが、彼娘には俺がやつたと言はないでくれ。そして只彼娘の爲めに使つてくれ。ほら靴とか、下着とか……なんでも必要なものにね、ぢや、お前さよなら……」

私は彼を門口まで送り出した。私は門番に食物を持つて来るやうに頼まねばならなかつた。エレナは其の時まで何にも食へなかつたのだ……

室へ歸つて來ると私は眩暈がして室の真中に打倒れた。エレナの叫聲だけは憶えてゐた。彼女は兩手を擴げて、私を支へやうと飛んで來た。私の記憶に残つてゐるのはそれだけであつた……

後で私はもう寢床の上に横はつてるのに氣が附いた。エレナは後で話したが彼女は其時私達の食事を運んで來た門番と一緒に私を長椅子の上に運んだのだ。私は幾度か眼を醒ましたが、其の都度私の上に腰を屈めてゐるエレナの同情深い心配さうな顔を見た。が、こんなことは皆ぼんやり夢のやうに憶えて居る。可哀想な小女の優しい姿が夢現のうちに絶えず私の前に幻影の繪でもあるかのやうにちらついた。彼女は私に茶を運んだり、私の蒲團を直してくれたたり、または私の前に悲しさに驚いたやうに坐つて、自分の指で私の髪の毛を撫で付けたりした。一度彼女は私の顔に、そつとキツスしたのを憶えてゐる。

また或時は夜中にふと眼を醒まして、私の前の長椅子に密着してゐる小卓の

上の蠟燭の光を透して、私はエレナが私の枕に顔を埋めて、その蒼白めた唇を半ば開けて、掌を自分の暖い頬に當てたまゝ臆病らしく眠つて居るのを見た。私がほんとに正氣に歸つたのは朝早くであつた。蠟燭は燃え盡きてゐた。ほのぼのと明るくなつてくる曙の蒼蒼色の光はもう壁に映つてゐた。エレナは卓子の前の椅子に腰を掛けてゐた。私は彼女のふつくりした無邪氣な顔に見惚れてゐたのを憶えてゐる。彼女の顔は、その眠つて居る處を見ると、何となく小供らしくない。哀愁の色を浮べて、如何にも變に病的な美しさが溢れてゐた。蒼白めて、肉の落ちた頬の上には長い睫毛が生へて、蒼い顔に垂れかゝつた木脂のやうな眞黒な髪の毛は蓬々として重さうに一方に縮れて垂れ下つてゐた。片方の手は私の枕の上に載つてあつた。私は其の瘦せた手を、そつと接吻した。不幸な少女の眼は醒めなかつたが、唯思ひなしか彼女の蒼白めた唇にチラツと微笑が浮んだやうであつた。私は彼女につくづく見惚れてゐたが、そのうちに

「すやい」と心地よい眠りに落ちた、今度は私は正午近くまで眠り通した。目が醒めて見ると、私は殆ど病気が癒つたやうな感じがした。唯身體の神経的な劇しい発作は私には以前にもあつたので、私はそれをよく知つてゐた。もうかれこれお正午であつた。第一に私の眼に入つたのは室の隅に紐で吊つてある昨日私の買った帷帳であつた。エレナは其處を取片附けて、自分の爲め特別な小さな間が造つてあつた。彼の女は暖爐の前に坐つて、茶を沸してゐた。私が眼を醒ましたのを見て快くニコニコと笑つて直ぐ私の傍へ來た。

「お前は俺の親友だ」と、私は言つて彼女の手を取つた。「お前は一晚中私を看病してくれたね。私はお前がそんなに心の優しい娘だとは知らなかつたよ。」

「でもあなたは私が看病したのを何うして知つて？ひよつとして私一晚中眠りはしなくつて？」

と彼女は人の善い、はいにかんてるやうな狡い表情を頬に浮べて、同時に自分

の言葉に顔を赤らめながら私を見て尋ねた。

「私は時々眼が醒めたので、すつかり見たよ。お前は夜明前に眠り始めたのだよ。」

「お茶を喫りますか？」と彼女はさも此の會話を續けるのが厭なやうに話を切つた。かういふことは純潔な、極く正直な心の人、他人に褒められる時によくすることである。

「飲みたいよ」と私は答へた。「だがお前は昨日晝飯を食べたかね？」

「晝飯は食べなかつたけど、夕飯は食べてよ。門番が持つて來てくれたの。だけど、あなた話してはいけないでせう。静かにお休みなさいな。あなたまだほんどでないですもの」と彼女は私に茶を持って來て、私の寢床に腰を下ろしながら言つた。

「寝てゐると言ふのか？では夕方まで寝てゐやう。だがねエレナ、私は夕方は

ちよつと出てくるよ。是非行かなきゃならない用があるのだよ、エレナ！」
 「まあ、行かなきゃならないなんて！誰の所へ行くの？昨日のお客さんの所ぢやなくつて？」
 「否、彼人の所ぢやないよ。」
 「まあ、彼人の所でなくてよかつたわ。彼人が昨日あなたを病氣にしたのよ。では彼の人のお嬢さんの所へ？」
 「だがお前何うして彼人の娘のことを知つてるのだ？」
 「私昨日皆聴いてよ」と彼女は下を向いて答へた。
 彼女は顔を擧めて、眉を眼の上にキツと寄せた。
 「あのお爺さんはいけないんだわ」と聽て彼女は附け加へた。
 「お前彼人を知つてゐるのか？そんな人ぢやないよ。彼人は極く善い人だよ。」
 「いえ、いえ、彼人は悪い人よ。私聴いてたわ」と彼女はむきになつて斯う

言つた。
 「ちや、お前は何を聴いたといふのだ？」
 「だつて、彼人は自分の娘を救すのを厭がつてゐるんですもの……」
 「だが、彼人は娘を愛してゐるんだよ、娘の方が彼人に對して悪いのさ。彼人は娘のために心配して、心を悩ましてゐるのだよ。」
 「では何うして救さないの？今救したつて娘さんは彼人の所へは行かないでせう。」
 「何うしてさうだ？何故？」
 「何故つて、あんな人は娘さんに可愛がられるやうな人ぢやないんだもの」と彼女は熱して答へた。「その娘さんは何時までも彼人の處を逃げて、物貰ひになつた方がまだわ。そゝして彼人は自分の娘が物貰ひをしてゐるのを見て、苦しむがいゝわ。」

彼女の眼は輝いて頬は熱つて来た。彼女はたゞ口から出まかせに言ふのでないと私は思った。

「あなたは彼人の家へ私をやらうとしたの？」と彼女は一寸黙つた後で言った。

「然うだよ。エレナ」

「いやよ、私はそれよりか下女に雇はれた方が餘程いゝわ。」

「ほんとお前は悪いことばかり言ふな、エレナ！何といふ馬鹿なことをいふのだ。ぢや誰の所へ雇はれるのだ？」

「何んな百姓の所だつていゝわ」と彼女は次第につん／＼しながら答へた。彼女はひどく燃え立ち易い娘であつた。

「百姓だつてお前のやうな働き手は要らないよ」と私は笑ひながら言つた。

「では且那方の處へ。」

「お前のやうな性質で且那方の所で住めると思ふか？」

「私のやうな者だつて」と彼女は激する程荒々しく答へた。

「だがお前は耐へ切れないよ。」

「耐へ切れませすとも、私を叱つても、私態と黙つてゐるわ。私を打つても矢張り黙つてゐるわ。何といつても黙り通してよ。打つたつて何うしたつて私泣きはしないわ。私が泣かなければ、あの人達は最つと／＼意地悪くなつてよ」

「何を云ふのさ、エレナ！お前は随分いぢけてゐるね。そしてお前は何と云ふ高慢な女だらう！お前はいろんな悲しい思ひをしたと見えるね……」

私は起上つて自分の大きな卓子の所へ近寄つた。エレナは長椅子に坐つたまま、物思はしげに下を見詰めて絨氈の縁をいぢつてゐた。彼女は黙つてゐた。

私の言葉に腹でも立てたのか知らずと私は思った。

卓子の傍に立つて、私は長篇小説の稿を急いで居ると

「あなたは其處でしよつちう何を書いてゐるの？」とエレナは静かに私の卓子

に近づいて、怪々しながら笑を浮べて云つた。

「いろんなことさ、エレナ！これでお金を取つてゐるだよ」

「願書なの？」

「小説」

「あなたはその小説で何の位お金を貰つて？」と彼女はやがて訊いた。

「そりや決つてゐないよ。時には澤山くれるし、時には仕事をしないので何も呉れないよ。六ヶ敷い仕事さ、エレナ。」

「ではあなたはお金持ちぢやないの？」

「無論さ。一文なしだ。」

「そんなら私働いてあなたを助けるわ……」

彼女はちらつと私を見て、眞赤になつて眼を俯せた。そして私の方に二歩ばかり近寄つて、急に私に両手で抱き着いた。そして顔を堅く堅く私の胸へ押し

つけた。私は吃驚して彼女を見詰めた。

「私あなたを愛してよ……私高慢な女ぢやないわ」と彼女は言つた。「あなたは昨日私のことを高慢な女だと仰有つたわね。さうぢやないわ、さうぢや……私そんな女ぢやないわ……私あなたを愛してよ。私を愛してくれるのはあなた一人つきりですもの……」

彼の女の胸にはもう涙が込み上げてゐた。そして直ぐにその涙は昨日の発作の時のやうに彼女の胸から迸つた。彼女は私の前に跪いて、私の手や足を接吻した……

「あなたは私を愛してくれるわね……」と彼女は繰り返した。「唯あなた一人だけ、一人だけよ……」

彼女は發作的に私の膝を両手で抱き緊めた。それまで堪えてゐた彼女の凡ての感情は制し難い猛烈な力で、一時に外へ激發した。そして私には此の時まで

堅く秘してゐた心の不思議な強情がよく解つた。それは自分をさらけ出して、すつかり打ち明けやうとする慾求が強ければ強いただけ益々頑固で、荒々しかつた。それは全身を愛と感謝と愛撫と涙とに献げて了ふ時に起る避け難い情熱である……

彼女はヒステリーになつたやうに泣きしやくつた。私はやつとのことで、私を抱き緊めて居る彼の女の手を解いた。私は彼女を抱きあげて長椅子の上へ運んだ。彼女はまだ長いことさも私を見るのが羞かしいかのやうに枕に顔を隠して泣いてゐたが自分の小さい手で私の手を確乎と握つて、それを自分の胸から離さなかつた。

彼女はだんだんと落ち着いた。が、未だ依然として私の方へは顔を擧げなかつた。そのうち顔を赤らめてニツコリ微笑むだ。

『よくなつたのか?』と私は尋ねた。『エレナ! お前は感情家だね、お前はほ

んとに痛々しい娘だね!』

『私エレナぢやないわ……』と彼女に顔を隠しながら叫むた。

『エレナぢやない。ぢや何と云ふのだね?』

『ネルリつていふの。お母さんは私をさう呼んだの……お母さんより他の人は誰もさう呼ばないの……私自分でもお母さんより他の人に然う呼ばれるのがいやなんですもの……だけどあなたは然う呼んで頂戴! 私然うして頂きたいわ……私あなたを何時までも愛してよ、何時までも……』

『ネルリ、お聴きよ』と暫くしてから私は云つた。『お前はお前を愛してたものはお母さん一人で、他に誰もないと言つたね。だが、お前のお祖父さんはほんとにお前を愛さなかつたかね?』

『愛さなかつたわ……』

『だが、お前は此處の階子段の所で、お祖父さんのことを思つて泣いたぢやな

いか？」

彼女は一寸の間思ひに沈むだ。

「いゝえ。愛さなかつたのよ。……彼人は悪い人ですもの」と彼女の顔には病的な感情が込み上げて来た。

「たがお祖父さんから何も求めやうがないぢやないか、ネルリ。彼人は全く氣が狂つてゐるらしかつた。彼人は狂人のやうな死に方をしたぢやないか。私はお前に彼人が何んな死に方をしたか話したらう。」

「えゝ、だけどお祖父さんは死ぬ間際になつてから急にあゝ毒殺したのよ。此處に一日中斯うして坐つたきりでゐたことが度々あつてよ。若し私が来なければ彼人は次の日も其の次の日も食べも飲みもしないで坐つてゐたでせうよ。でも其の前にはお祖父さんはもつとずつとよかつたわ。」

「前つて何時頃？」

「まだお母さんが亡くならかつた頃よ。」

「では、お前が彼人に食物や飲物を持つて来たのかネルリ？」

「エ私を持つて来たの。」

「お前何處から持つて来たの、アブノワから……」

「いゝえ、私一度だつてアブノワなんかから物を貰つたことは無いわ。」と、彼女は何となく頼み聲でむきになつて言つた。

「では、何處から持つて来たのだ。お前の所には何もなかつたらう？」

ネルリは黙つて恐ろしく眞蒼まつきさになつた。やがて長くちつと私を見つめた。

「私街道へ物貰ひに行つたの……五コペーク程貰つて彼人にパンと嗅ぎ煙草を買つてやつたの……」

「して、彼人がそん麼事まことを頼むたのか！ネルリ！」

「私初めは自分で行つたの、彼人には言はないで。だけど、彼人がそれを知つ

てからは、自分で私を物貰ひに遣つたの。私が橋の上に立つて、道を通る人から貰つて居ると彼人は橋の邊りを歩いてゐて待つてゐたの。そして私に呉れたと見ると。すぐ私の所へ飛んで来るのよ。まるで私が彼人から隠してもするやうに、私から金を取り上げて了ふのよ。』

斯う云つて彼女は變な鋭い苦笑を浮べた。

『そんなことはみんなお母さんが亡くなつてからのことよ』と彼女は附加へた。

『それから彼人はもうすっかり狂人のやうになつて了つたの。』

『ではお祖父さんはお前のお母さんを非常に愛してゐたのだね？ 何うして彼人はお母さんと一緒に暮らさなかつたの？』

『いゝゝ、愛さなかつたのよ……彼人は悪い人でしたの、お母さんを救さなかつたんですもの……昨日のあの意地悪いお爺さんのやうに』と女は殆んど囁くやうな小聲で言つた。益々顔か蒼くなつた。

私は震ひ上つた。一つの小説の筋がちらつと私の想像のうちに輝つた。自分が今救ひあげた此の不幸な女。自分の實の娘であり此の女を呪つた祖父を時々訪ねてゆく孤兒の彼女。珈琲店で自分の犬の死んだ後から死んで行く老えた奇人の老翁……。

虐げられし人々 上巻終

動物の身じり人々上巻

谷人の世論...
動物の身じり人々上巻...
動物の身じり人々下巻...
動物の身じり人々上巻...
動物の身じり人々下巻...
動物の身じり人々上巻...
動物の身じり人々下巻...

アカギ叢書

毎月數篇
逐次刊行
（定價金拾錢）
（郵稅各貳錢）

- 第一編 歐洲文藝 村上靜人原作 ▲ 人形の家 (ノラ名)
- 第二編 哲學叢話 中島文學士編 ▲ プラダグマチズム
- 第三編 歐洲文藝 日野月文學士編 ▲ 廢都 (劇に現はれたる女性改題)
- 第四編 社會學 葛西文學士譯 ▲ 群衆心理 (上卷)
- 第五編 歐洲文藝 原ドストイエフスキイ ▲ 痴人
- 第六編 歐洲文藝 村上靜人著 ▲ キウエントデと其著作
- 第七編 哲學叢話 三浦文學士篇 ▲ ベルグソンの哲學

○第八編	歐洲文藝	オスカア・ウワイルド	村 上 静 人 譯	▲	サ	ロ	メ
○第九編	哲學叢話	中島文學士編	▲	オ	イ	ケ	ン
○第十編	博物叢話	寺尾理學士編	▲	イ	ダ	ノ	ウ
○第十一編	日本史談	龍居文學士著	▲	文	政	化	江
○第十二編	歐洲文藝	フライタツハ	齋藤文學士編	▲	文	政	化
○第十三編	歐洲文藝	スチゲンソン	齋藤文學士編	▲	劇	喜	新
○第十四編	歐洲文藝	トルストイ	村上 静 人 編	▲	復	壺	の
○第十五編	歐洲文藝	(絶版發賣禁止)	▲	レ	デ	イ	ー
○第十六編	美術叢話	佐々木文學士著	▲	奈	良	の	美
				▲	術		

○第十七編	歐洲文藝	モーパッサン	村上 静 人 編	▲	女	の	一
○第十八編	歐洲文藝	メーテルリンク	村上 静 人 編	▲	モ	ン	ナ
○第十九編	日本史談	龍居文學士著	▲	日	本	建	築
○第二十編	社會學叢話	ル・ボノン	葛西又次郎 譯	▲	群	衆	心
○第二十一編	美術叢話	桑山文學士編	▲	支	那	の	美
○第二十二編	歐洲文藝	板垣文學士編	▲	ワ	ン	ダ	ー
○第二十三編	歐洲文藝	ストリンダベルヒ	村上 静 人 編	▲	父		
○第二十四編	歐洲文藝	沙村 上 静 翁	編作	▲	ハ	ム	レ
○第二十五編	歐洲文藝	ダヌンチオ	日野月文學士編	▲	ジ	ヨ	バ
				▲	ン	ニ	(上卷)

○第廿六編

歐洲文藝全集

全ジヨバンニ (下卷)

○第廿七編

歐洲文藝村上静人編

神曲

○第廿八編

日本史談龍居文學士著

鎌倉の史話

○第廿九編

歐洲文藝板垣文學士編

ユニーデット

○第卅編

歐洲文藝ピエトロ・コッサ編

皇帝ネロ

○第卅一編

禮節叢話獨逸大使館員著

歐洲禮節

○第卅二編

歐洲文藝村上静人編

海の夫人

○第卅三編

宗教叢話東北大學講師編

オイケンの宗教思想

○第卅四編

地理叢話マルコポーロ原編

東方見聞録

○第卅五編

歐洲文藝葛西文學士原著

モーパッサン論 附ドストイエ

○第卅六編

歐洲文藝島田青峯編

絆

○第卅七編

歐洲文藝トルストイ原編

暗の力

○第卅八編

歐洲文藝島田青峯編

武器と人 (ナヨコレツト兵隊)

○第卅九編

歐洲文藝村上静人編

鴨

○第四十編

歴史叢話小林愛雄著

神話と傳説

○第四十一編

歐洲文學ズィデルマン編

マダダ (故郷)

○第四十二編

歐洲文學ドストイエフスキ編

虐げられし人々 (上卷)

○第四十三編

歐洲文學ウルゲニエフ原編

初恋

○第四十四編	演藝叢談	小林愛雄著	西洋演劇史
○第四十五編	歐洲文藝	フロオベル原作 畑文學士編	サラソンボ
○第四十六編	音樂叢話	小山文學士著	日本淨瑠璃史
○第四十七編	歐洲文藝	モーパッサン原作 半田文學士編	ピエール・と・ジアン
○第四十八編	歐洲文藝	ダヌンチオ原作 日野月文學士編	死の勝利
○第四十九編	歐洲文藝	シエンキウイツチ編 桑山文學士編	何處へ行く
○第五十編	歐洲文藝	ドストイェフスキ編 大井文學士編	罪と罰
○第五十一編	歐洲文藝	ドオデエ編 黒田文學士編	サフラン

● 頒布部數數十萬を越へたる 赤城叢書既刊目錄 ●

大正三年八月十五日 印刷行

(定價金拾錢) (郵税金貳錢)

著者 加藤朝鳥
 發行者 赤城正藏
 印刷者 中田福三郎
 印刷所 秀英舎第一工場
 東京市豊町區三番町五〇
 東京市込區市谷加賀町一丁目十二番地



發兌元 賣捌所

東京市豊町區三番町五〇
 電話番町二二八〇番
 櫻井口座東京一〇四三二

赤城正藏 全國各書林

LTP
970

ムラクレ

書叢ギカア

の本日

簡潔

特色

平明

○紳士の標準智識○

1. 古今東西の科學藝文中 紳士の標準智識たるべきものを聚取し解説せり

2. 従前の刊行物の高價、尨大、難澁なるが爲めに當然辨知し置くべき著述なるにも關せず止むを得ず閑却せられたるもの多きを憂ひ専ら廉價、平易、簡明に解説し刊行せり

3. 内外の傑作の紹介は簡單にコンデンスしたりと雖妙味に到つては毫も減殺する所なし

○世界學術の叢淵○

◀也錢拾金僅に册各▶

終

